

親に生きる力を

だ」と話す。

「私の子どもも、保育園から『消えた』ことになるのでしょー」。和歌山県内の介護士の女性(49)は、身体障害のある21歳の長男と19歳の次男を連れて1年2カ月、街をさまよひ、心中まで考えた経歴を語った。

約2年前、施設から雪の中に締め出され、心が折れた。子どもたちは「死ぬなんてだめだ」。「私を見捨てなかつた子どもがいたから生きられた」

借金も重くのしかかり、保育園に入れた3歳の長女と2人の息子と身を隠した。関東地方の実家は老いた父だけ。役場の窓口を何度も訪ねたが、助けにならなかつた。

09年春、偶然、民間の生活支援相談事業のチラシを見かけた。生活保護の申請ができ生活を立て直せた。長女を再び保育園に通わせ、働きに出た。今は子育てに悩む人の相談にも乗っている。事業の関係者は「役所の相談窓口に行っても対応が悪いと『不信』や『あきらめ』になってしまう。民間も加えたネットワークで支ええる姿勢が必要

NPO心をケア

「人と目を合わせられへん」。今月初旬、大阪市東成区の母子生活支援施設「東さくら園」。3人の子を持つ女性(28)の訴えに、社会的弱者の自立を支援するNPO法人

「WANA関西」代表理事の藤木美奈子さん(51)が改善したという。東さくら園がソーシャルスキルトレーニングを取り入れたのは、一部の入所者に人間関係を築く能力の弱さがみられたためだ。職が続かなかつたり、子を連れて突然姿を消すケースも年間数件、発生する。

広瀬みどり施設長(53)は「そういう母親は厳しい環境で育っている」と強調する。藤木さんも「不安定な環境で育った人はそうでない人と同じスタートラインに立っていない。まず心をケアしたい」とトレーニングの意義を話した。【児童虐待取材班】

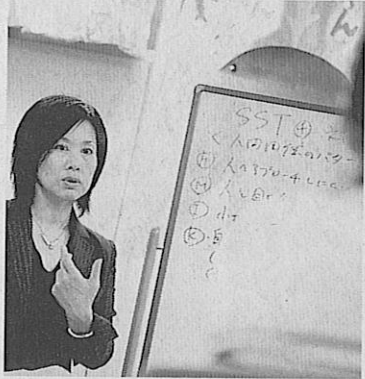
〓つづく

救え幼い命

「消えた子」どこへ

4

ソーシャルスキルトレーニングで話をする藤木美奈子さん(51)と員塚太一撮影



藤木さん自身も貧しい母子家庭に生まれ、義父から虐待、前夫にも暴力を受けた。離婚後も人のかかわりがうまくいかず、職場などでけんかを繰り返した。「家族から暴力を受けた影響」と気付き、行動前に一呼吸置いて相手の受け答えを予想することを心がけると、人間関係

ご意見、ご感想は、メール o.shakaibu@mainichi.co.jp、ファクス06・6346・8187か、〒530-8251(住所不要)毎日新聞社会部「虐待取材班」まで。

